

豊平のあゆみ

2022年 区制50周年
特別企画 第3回

令和4（2022）年に迎える節目を
前に、豊平区の歴史をたどります

～農業編～

人口約22万5千人の豊平区。交通機関や商業施設、スポーツ施設などが整備され、多くの人々が生活するこのまちは、かつては田畑が広がる農業が盛んなところでした。特別企画第3回目の今回は、豊平区の農業の歴史を振り返ります。

【詳細】区役所総務企画課 ☎822-2407

1 コメ作り

明治の初めごろ、豊平川からくみ上げていた生活用の水をより使いやすくするため、精進川から平岸道を通って豊平川に注ぐ5.3㍓の用水路が造られました。用水路はその後、豊平、美園から白石の方へ広範囲にわたって整備され、農業に利用されました。

用水路が整備された地域では稲作が広がりましたが、寒冷地のため、冷害による不良が多く発生し農家の苦勞が絶えませんでした。そんな中、平岸の^{しげのぶらへい}重延卯平氏が栽培技術や農具の改良に努め、稲作の普及に貢献しました。その後、昭和の初めごろには冷害対策として、新しい育苗法が考案されるなどし、次第に収穫量が増えていきましたが、戦後しばらくして急速な都市化が進むに従い、用水路は埋め立てられ、稲作は衰退していきました。



▲旧用水路概図（『郷土史豊平地区の140年』を参考に作成）



出典：北海道庁『東宮殿下行啓記念 下』（明治44年）

▲平岸にあった用水路。現在は平岸通

札幌市公文書館所蔵



▲明治期の果樹園

2 リンゴの栽培

区内各地に点在する旧リンゴ倉庫や、環状通の「リンゴ並木」に見られるように、豊平区の各地ではリンゴ栽培が盛んに行われ、「平岸リンゴ」「札幌リンゴ」の名で呼ばれるなど、地域の特産品となっていました。札幌でリンゴ栽培が始まったのは明治6（1873）年。東京から開拓使の官園に苗木が送られ、その後、開拓使本庁内にあった果樹園から、明治8（1875）年ごろに平岸に苗木が配られ栽培が始まりました。明治15（1882）年ごろに初めて実を付け、明治20（1887）年から30（1897）年ごろには、全国的にもリンゴ栽培が盛んな地域となっていたようです。明治27（1894）年には海外輸送の道が開かれ、明治37（1904）年にはウラジオストクなどに輸出されたこともありましたが、その後、木の老化などにより、病害虫の発生や凶作に悩まされるようになりました。

（平岸1条18丁目他）
歌碑「天神山緑地」
札幌市公文書館所蔵



▲旧リンゴ倉庫

そこで、昭和の初めには、青森から来た北海道大学の^{しまよしちか}島善鄰氏に指導を受けたり、生産農家 10 人が青森へ行き栽培方法を学んだりして、地域に知識や技術を広めたため、リンゴ産地として大きく前進しました。昭和 11 (1936) 年にはシンガポールへの輸出が試みられましたが、戦争が始まると、肥料や農薬、人員の不足などにより樹木の手入れが行き届かず、病害虫の被害が深刻化しました。戦後は一転、食糧不足の影響でリンゴが闇で高価に取り引きされ、農家は景気に沸きました。その後、食糧事情が改善されると、他の産地との競争が激しくなったため、昭和 26 (1951) 年からはデパートでの催事開催など、販売方法の工夫に努めました。その後も大きな台風被害を受けながらも、機械化により作業の効率化を図るなどの努力を重ねましたが、昭和 40 年代には、リンゴ園は次々と姿を消していきました。



▲リンゴの収穫 (昭和 37 年)

3 ジャガイモの栽培



▲馬を使ったジャガイモの収穫 (昭和 35 年ごろ)

西岡、福住、月寒などではリンゴの他、ジャガイモも作られていました。明治時代から栽培が始まり、大正 12 (1923) 年ごろは「ロシヤイモ」「田中イモ」などと呼ばれていた由来不明の食用のジャガイモが作られていましたが、その名称が無かったため、昭和 3 (1928) 年にこれを「石狩白丸」と定め、以来それが一般化しました。一方、同年、姫路の種苗会社からメークインの種イモの注文があり、西岡で生産されたものを出荷したところ、価格が非常に高く生産者が驚くほどでした。これをきっかけに、従来の食用に代わって本州への出荷用の種イモの栽培が盛んになりました。しかし、その後戦争が始まると、病気のまん延などにより収穫

量が激減してしまいました。戦後は、かつての豊平の種イモを復活させようと、昭和 22 (1947) 年に栽培農家が集まり「豊平種子馬鈴薯採種組合」を結成。より良い原種の追求や病気のイモの選別などにより品質改善に努め、昭和 29 (1954) 年ごろには再び本州に出荷できるようになり、その後、平成 8 (1996) 年ごろまで種イモの生産と出荷が続きました。

～面影を訪ねて～

豊平区ではここで紹介したコメ、リンゴ、ジャガイモの他にも、大豆、エンバク、ホップなど、さまざまな作物が栽培されていた他、酪農や養鶏、養豚なども行われていました。しかし、高度経済成長期の宅地開発や後継者不足などにより農地が宅地に転用され、今はその面影はほとんど見られません。それでも、平岸郷土史料館、つきさっぷ郷土資料館、福住開拓記念館には、農機具や生活用具などが大切に保管・展示され、当時の人々の暮らしを今に伝えています。



◀動力噴霧機
【平岸郷土史料館 (平岸 3 条 9 丁目)】

ジャガイモの袋 ▶
【福住開拓記念館 (福住 1 条 4 丁目)】



2022年も
お楽しみに!

さまざまなテーマで今に至る豊平区の歴史を紹介していきます



【参考文献】『郷土史豊平地区の140年』『さっぽろ文庫40札幌収穫物語』『新札幌市史』『豊平区の歴史』『豊平町史』『豊平町史補遺』『豊平東部農業協同組合30年史』『西岡百年史』『平岸百拾年』など

背景は昭和 31 (1956) 年の美園付近の風景

